

小論文問題用紙

問題 次の文章を読んで、「おたがいのあいだに共有できないでいる言葉も少なくありません」ということについて、あなたの考えを述べなさい。字数は七〇〇字以上八〇〇字以下とします。

なお、本文中のふりがなにカタカナ表記の部分があるが、それは原文のまま記したものである。

いま、わたしたちのコミュニケーションの方法は、実にゆたかに、多様になりました。それだけに、おたがいのあいだを結ぶコミュニケーションのあり方も、さまざまに異なるようになり、いつそう複雑にもなつて、おたがいの意思の伝え方も、気持ちの表し方も、いろいろに異なつてきて、おたがいを結ぶはずのコミュニケーションが逆に、おたがいを隔て、遠えるようになってきています。

それだけに、共通の言葉を共有するということが難しくなつて、おたがいのあいだに、知らない言葉がとでも多くなつていきます。逆に、誰もがよくよく知っていると思う言葉であっても、実はそれぞれに意味するもの、その言葉によつて了解しているものが、けつしておなじではなくなつて、おたがいのあいだに共有できないでいる言葉も少なくありません。

いま、時は、五月。しかし、その「五月」という言葉一つとっても、それぞれにとつての「五月」は「五月晴れ」と「五月病」がまったく違う「五月」であるように、さまざまに違つていきます。「五月」という言葉はあなたにとつて、あるいは自分にとつていつたどんな意味をもつ言葉でしょうか。

五月は「端午の節句」。端午の節句と言うと「柏餅」。しかし、なぜ柏の葉を餅を包むのでしょうか。あるいは五月は「子どもの日」。子どもの日と言うとき、何を真っ先に思い描くでしょうか。大人たちなら、子どもの日にどんな思い出があるでしょうか。五月はまた「母の日」の月。母の日がカーネーションの日であるように、五月は花の月です。

「美しい五月」と言われる五月の美しさを代表する花は、何でしょうか。ライラックでしょうか。ライラックとはリラのことですが、あなたにとつてその花の名はライラックでしょうか。リラでしょうか。文字通り「五月の花」という意味のメイフラワーはサンザシの花ですが、北米大陸への英国からの最初の移住者をのせた船の名でもあります。

森鷗外は明治三十七年、一九〇四年の五月、日露戦争に陸軍の軍医として、当時の満州に赴きます。「一年後の五月の、妻への手紙」。「こちらは今が春の初と春の中頃と一しよに來たやうなぐはひで桃だの杏だの李だの皆花が咲く」。その次の手紙に、「急に暖くなつて來てけふなんぞはひる中は馬の上でも汗が出るくらゐだ。それだから草や木の花がみんな一度にさく。しかし梅や桜は一本もない。一番多いのは杏の花だ。(…)赤いのが一ぱいさいたところは中々きれいだ。草ではおきな草といふ紫の花が一番多くさいてゐる」

そうして鷗外は、「花なんか手紙にいたら馬鹿だといふだらう。(…)アハ、。」と言いながら、手紙にそのおきな草を一輪入れていきます。一週間後の手紙に、「杏の花が雨でちつてしまつて野原は真青になつた。もう程なく夏になるだらう」。印象的な鷗外の五月の花ですが、海では、いわゆる日本海海戦で日本がロシアを破るのが、そのおなじ五月の末です。

五月の詩人と言へば、何と言つても木下李太郎です。李太郎にとつて五月とは「燕は來り、また去れる」「篠懸木のわか葉ふるへる」五月であり、「八百屋は八百屋で枇杷の走り——一寸お昼の献立は——茄子のしぎ焼き、胡瓜もみ」の「さう云ふ五月」です。

そしてもう一人、寺山修司です。「二十歳、僕は五月に誕生した。僕は木の葉をふみ若い樹木たちをよんでみる。いまこそ時、僕は僕の季節の入口で、はにかみながら鳥たちへ、手をあげてみる。二十歳、僕は五月に誕生した」。寺山修司の五月は「誕生」の月です。しかし、寺山修司は北の青森の人で、生まれたのは実際は冬の十二月。大地の生命の誕生を告げる青森の春のはじまりの五月に、詩人の「僕」の誕生をかさねたのが、寺山の「五月の詩」。

わたし自身にとつての忘れがたいのは、芭蕉の五月です。わたしは奥州福島生まれですが、『奥の細道』の松尾芭蕉が「福島に宿る」のが五月。「明くれば、信夫の里に行く」という芭蕉の言葉を思いだして、里心を覚えるのがわたしの五月です。

「五月」を辞書でひいても、辞書にはただ「一年の五番目の月」としかでていません。しかし、「五月」というたった一つの言葉にも、こんなふうに、人それぞれにさまざまに沢山の意味とニュアンスが豊まっています。

言葉というのは、一つの決まつた意味しかもたないものではありません。無数の人びとのさまざまな記憶や行為、出来事や感情、気分がそこに重なつてゆく場所が、一つ一つの言葉です。

今日、コミュニケーションが乏しいと言われるとき、乏しいのは本当はコミュニケーションではなくて、言葉です。コミュニケーションをゆたかにしてゆくためには、言葉をゆたかにできなくてはいけない。コミュニケーションというものは、そういう意味で、「この言葉は」という言葉を大事にする。そうして、そうした言葉を訊ねる、調べる、疑う、確かめる、いろいろ繰りかえして、そうやって自分の辞書をつくつてゆくところからはじまると、私は考えています。

わたしたちはどれだけ自分の辞書を、自分をゆたかにするものとして、自分にもつていくでしょうか。

(長田弘の文章による)